

社会主義者の「喜劇」：ウィリアム・モリスの『テーブルはくつがえる、またはナプキンは目覚める』に関する一考察

木村 竜太

はじめに

ウィリアム・モリス (1834-96) が、社会主義者として未来のヴィジョンを描き上げた『ユートピアだより』 (*News from Nowhere ; or, an Epoch of Rest : Being some Chapters from a Utopian Romance*) を所属する社会主義同盟の機関誌『コモンウィール』 (*Commonweal*) 誌に連載したのは 1890 年のことである。その『ユートピアだより』と「夢物語」の形式で対となるとも言える『ジョン・ボールの夢』 (*A Dream of John Ball*) が同じく『コモンウィール』誌に連載されたのは、1886 年から 87 年 1 月にかけてのことであった。この二つのロマンスは、モリスのヴィジョンや歴史観、社会主義思想を示すものとしてモリスの思想研究においては特に重要なものとして様々に取り上げられ、考察されてきた。

これらのロマンスの連載に挟まれた時期にモリスはひとつの劇を書き上げ、上演している^{*1}。それがモリスが "interlude"^{*2} と呼んだ『テーブ

*1 娘であるメイ宛での 9 月 24 日付けの手紙でこの劇に「奔走している」と書いている (Norman Kelvin (ed.), *The Collected Letters of William Morris*, Princeton, 1984-96, vol.II, p.694. 以下 *Collected Letters* と記す)。また同じくメイ宛の 9 月 21 日付けの手紙では、ジョージ・バーナード・ショーがこの劇で演じることに同意してくれたと書いており (*ibid.*, p.692. 結局の所、ショーはこの劇では

ルはくつがえる、またはナプキンは目覚める』 (*The Tables Turned, or Nupkins Awakened*) である。この劇は、雑誌『コモンウィール』誌の資金を調達するために、1887年10月15日に始めて上演された。上演は成功を収め、少なくとも十一回は公演が行われた^{*3}。初演翌週発行の『コモンウィール』誌によると、「その劇はとてもよく観客に迎えられ、大変称賛された。大変多くの人が入場することができなかつたので、この土曜日(10月22日)にも再演されることが決定した…」という^{*4}。また11月5付けの『コモンウィール』誌の記事では、10月22日および29日の公演も成功を収め、「めったに社会主義の会合では見かけられないような多くの人」が観客には含まれていたとし、プロパガンダがうまくなされつつあると述べられている^{*5}。

演じてはいない。しかし、劇は観に行っており、後にモリスの劇作について論じている)、この時期のモリスのこの劇への取り組みがうかがえる。尚、劇題『テーブルはくつがえる、またはナプキンは目覚める』についてはフィリップ・ヘンダーソン(川端康雄・志田均・永江敦訳)『ウィリアム・モリス伝』晶文社、1990年を参照し、その訳を使わせていただいた。

*2 パメラ・ブラッケン・ウィーンズは、この"interlude"という言葉に関して、十九世紀半ばにおいては一般向けの舞台演劇や喜劇という意味を含んでいたが、中世への意識を強く持っていたモリスはこの言葉を長い神秘劇や道徳劇の上演の間に導入されるような「軽い、滑稽なもの」という意味で使っているのではないかと指摘している (Pamela Bracken Wiens (ed.), *The Tables Turned, or Nupkins Awakened: A Socialist Interlude by William Morris*, Ohio, 1994, p.6. 以下 *The Tables Turned* と記す)。またモリスが現代劇を好んでいなかったことについてはメイが言及している (May Morris (ed.), *The Collected Works of William Morris*, London, 1966, vol.22, p.xvii. 以下 *Collected Works* と記す)。ただし、ニコラス・サーモンはモリスの演劇嫌いという評は一面にすぎず、モリスが劇場に行っていたことを示す記録も多くあると指摘している (Nicholas Salmon, "The Unmanageable Playgoer: Morris and the Victorian Theatre", *The Journal of the William Morris Society*, XII, No.4, Spring 1998)。

*3 Pamela Bracken Wiens, "The Reviews Are In: Reclaiming the Success of Morris's "Socialist Interlude"", *The Journal of the William Morris Society*, IX, No.2, Spring 1991, p.17 および同論文注 8 を参照のこと。

*4 *Commonweal*, 22 October 1887, p.343.

*5 *Commonweal*, 5 November 1887, p.359. またこの記事にはクロポトキン

・モリスの唯一の劇作⁶であるこの劇は、この点でモリスの社会主義活動において、社会主義同盟の活動において重要な役割を果たしている。しかし、それだけでなく、この作品には、その第一部においてはモリスが当時の社会主義活動において直面していた問題への言及が、そして第二部においてはモリスが講演・論考で論じていたこと、あるいは後の『コモンウィール』誌の論考や『ユートピアだより』に描かれる未来社会の構想が垣間見られるのである。そこで、本稿ではモリスの社会主義思想・活動における『テーブルはくつがえる、またはナプキンは目覚める』の占める位置という問題を考察し、その作品の持つ意味を探りたい。

1 『テーブルはくつがえる、またはナプキンは目覚める』を巡る研究史と問題点

『テーブルはくつがえる、またはナプキンは目覚める』が劇として成功を収め、またプロパガンダとしての役割を果たしたと認識されていたことは上述の通りである。ジョージ・バーナード・ショーは、後に、「記憶している限りではそれほどの成功を収めた初演は他になかった」と述べ、モリスがケルムスコット・プレスの代わりにケルムスコット劇場を始めていたならば、十年以内に地上のあらゆる劇場に影響を与えたと述べ、モリスの劇、劇作の力を称賛している⁷。

こうした成功にもかかわらず、この劇はモリスの思想史研究におい

らがこの劇に関心を示したことも記されている。

*6 この劇以外にも長編詩『恋こそすべて』(Love Is Enough)等に劇としての要素を見る論もある。この点に関しては、Jo George, "The Aristophanes of Hammersmith: William Morris as Playwright", *The Journal of William Morris Studies*, XX, No.2, Summer 2013, pp.16-29を参照のこと。

*7 George Bernard Shaw, *Our Theatres in the Nineties*, London, 1932 (reprinted 1948), vol.II, pp.213-5. またショーはモリスがシリアスな芝居にも取り組んでみたいと話していたと述べ、機会があったならそれが実現されたであろうとし、モリスが劇作に関心を強く持っていたことを指摘している (*ibid.*, p.213)。

ては重要視されているとは言えない。パメラ・ブラッケン・ウィーンズは1991年の論考において、この作品は軽視されてきた、あるいは時代遅れのなものとして見られてきたのだと述べ、例えばJ. W. マッケイル、E. P. トムスンらもこのモリスの劇にはほんのわずかの関心しか見せていないということを指摘している*8。こうした扱いは94年に出版されたフィオナ・マッカシーによる伝記でも変わることはない*9。モリスと劇との関わりに関してはいくつかの論があり、例えば、ニコラス・サーモンはモリスの演劇への関わりを述べつつ、『テーブルはくつがえる、またはナプキンは目覚める』の試みを通してモリスがヴィクトリア朝後期の重要な劇作家との交際を得たことを論じている*10。またジョー・ジョージはモリスが中世の神秘劇や道徳劇の影響を受けていたことを指摘している*11。

ショーは、モリスのこの劇を「時事問題を扱った笑劇」と評した*12。この劇のこうした同時代的な側面はモリスの思想史的側面から見ると重要であろう。ニコラス・サーモンはこの点について、この劇の成功はモリスが「同時代の重大な出来事からユーモアを引き出した」方法によっているのだと述べている*13。彼は、この劇に描かれる個々のエピソードがモリスや社会主義団体が直面していた現実を反映していることを論じている。例えば、この劇は当時問題と見なされていた警察の取り締まりが社会主義者に偏っていること、金持ちと貧乏人の間で法の扱い方で差があること、警察の偽証問題などを描き出している。またニコラス・サーモンは、モリスの現状把握の視点が生み出した劇に

*8 Pamela Bracken Wiens, *op.cit.*, p.19 および同論文注 25 を参照のこと。

*9 Fiona MacCarthy, *William Morris : A Life for Our Time*, London, 1994, pp.564-6.

*10 Nicholas Salmon, *op.cit.*

*11 Jo George, *op.cit.*

*12 George Bernard Shaw, *op.cit.*, p.212.

*13 Nicholas Salmon, "Topical Realism in *The Tables Turned*", *The Journal of the William Morris Society*, Vol. XI, No. 2, Spring 1995, p.13.

描き出されるユーモアの要素として、社会主義運動の前に立ちはだかる困難さと、それとは対照的な同時代の人々、特にブルジョアジーたちが社会主義に対して感じている脅威との対比を指摘している。他方で、彼はこの劇にはそれ以外の点、特に劇の後半部分の社会主義が達成された時代の描写では見るべき所はないとし、「結局の所、モリスは時事問題的なリアリズムと抽象的思索を調和させることができなかつた」のだと述べる*14。

このようなモリスへのそれ以前の劇の影響、モリスと同時代の劇との関わり、モリスの経験した同時代的な視点からこの作品を見ることは、モリスの十九世紀性、モリスの文学論、モリスの社会主義運動論において重要な示唆となり得る。しかし、本稿ではその他の部分にも注目して見ていきたいと考える。例えば、マーカス・ウェイスは、ニコラス・サーモンが軽視したこの劇の第二部の描写に『ユートピアだより』にも連なる歓待、寛容の精神を見て取る*15。本稿もそのように『テーブルはくつがえる、またはナプキンは目覚める』をモリス思想史の広がりの中に置いて見ようという試みである。それによって、従来見過ごされることの多かつたこの劇のモリス思想史における意味・意義を問いたいと思う。

2 『テーブルはくつがえる、またはナプキンは目覚める』と時代

この劇は1887年秋に初演が行われた。この時期はモリスの社会主義活動の転機であつたとも言える。モリスが社会主義者となつたことの一つの理由は、「商業主義や利益追求という現システムのもとでは、芸術は真の生命も成長も得ることはできないということ」*16を確信し、社会主義によってそれが達成し得ると信じたことにある。社会主義者

*14 *Ibid.*, p.18.

*15 Marcus Waithe, *William Morris's Utopia of Strangers: Victorian Medievalism and the Ideal of Hospitality*, Cambridge, 2006, pp.148-56.

*16 "To Andreas Scheu, September 15, 1883", *Collected Letters*, vol. II, p.230.

となった当初、モリスはその実現を楽観的に見ていた^{*17}。

しかし、この楽観的な態度は1887年の彼の日記からは消えている。モリスが日々の運動の中で経験せざるを得なかったのは、労働者たちの社会主義への理解の欠如であった。彼の説く社会主義思想は、例え熱心に聞かれていたとしても、「何の熱狂も無しに」受け取られ、どれだけ簡単に説いたとしても聴衆は困惑するのみであったという^{*18}。

加えて、彼自身が社会民主連盟を脱退し社会主義同盟を結成したように、社会主義運動内にも問題が存在している^{*19}。彼は同じ日記において、運動内の党派性に関する問題を語っている。同盟内の革命に議会を手段として使うか否かについての議論が議会派と反議会派というセクションをつくりあげていたこと、さらにアナーキストとコレクティブイヴィストとの間にも問題があったこと等を記している^{*20}。

*17 モリスが民主連盟 (Democratic Federation、84年、社会民主連盟 (Social Democratic Federation) に改名) に加盟したのは1883年のことであるが、その翌年の論考「イングランドにおける社会主義」 ("Socialism in England") では、「その革命がすみやかに出現することへの希望は、今や民主連盟の活動によって何千人もの人々に染みこんでおり、社会主義はこの国では思弁哲学以上のものに急速になりつつある…疑いようもなく、その希望は広がっており、我々のうちの幾人かが少し前に可能だと考えていたよりもずっと早く希望は広がっている。そして、その希望が多くの民衆の心に一旦受け入れられれば、新しき日の始まりはすぐ近くにあることは明らかである」と述べている (Nicholas Salmon (ed.), *Political Writings: Contributions to Justice and Commonweal 1883-1890*, Bristol, 1994, pp.55-6. 以下 *Political Writings* と記す)。

*18 Florence Boos, (ed.), *William Morris's Socialist Diary*, London, 1982, p.26 (以下 *Diary* と記す)。

*19 モリスは『テーブルはくつがえる、またはナプキンは目覚める』内で、イギリスには社会主義が広まりつつあるが、社会主義者は三つの主要な団体 (the Federationist League, the International Federation, the Fabian Democratic Parliamentary League) に分かれていると述べ、その状況をユーモラスに描き出している。三つの団体は名前は変えられているが、社会主義同盟、社会民主連盟、フェビアン協会のことであろう (*The Tables Turned*, p.48 および同書注8を参照のこと)。

*20 *Diary*, p.37.

社会主義運動を取り巻く状況も社会主義者や労働運動にとって難しいものとなりつつあった。例えば、これは『テーブルはくつがえる、またはナプキンが目覚める』の初演後の出来事であるが、「血の日曜日」（1887年11月13日）事件がある。「言論の自由」の訴えに加えてアイルランド「鎮圧法」への反対から、数千人のデモ隊がトラファルガー広場へ行進した。広場使用の禁止の命令にしたがった警官隊の攻撃により、75人が逮捕、200人が病院で怪我の治療を受け、内三人が死亡したという事件である。数千人のデモ隊が警官隊の暴力や組織力になすすべもなく打ち砕かれたというこの事件がモリスに与えた衝撃は大きかったようだ。この事件の後に書かれた「包囲状態にあるロンドン」（"London in a State of Siege"）という小論において、こうしたデモ隊の敗北が「あまりに素早く起こったこと、軍隊的な組織があまりに容易に勝利を収めたことに私は驚いた」*21と述べている。この後、革命の到来そのものへの幻滅はなかったとは言え、即座の革命への希望は後退していったと言える。

「血の日曜日」事件に至るデモのきっかけの一つとなったのは、「言論の自由」問題であった。モリスはこの問題を『テーブルはくつがえる、またはナプキンが目覚める』の中でも描いている。この「言論の自由」問題は、一方で社会主義運動の広がりを示すと言えるかもしれないが、他方では社会主義運動を取り巻く厳しい状況を示すものでもあった。この問題は、ドッド・ストリートでの集会を巡る警察の干渉に端を発する。社会主義を説く者たちの運動が「警察の注意をひき、弾圧と干渉の対象とされはじめたのは、1885年7月」のことであった*22。この警察の干渉は、次第に露骨な形を取り、「道路妨害」を理由

*21 *Political Writings*, p.303.

*22 安川悦子『イギリス労働運動と社会主義 —「社会主義の復活」とその時代の思想史的研究—』お茶の水書房、1993年、52頁。以降の「言論の自由」問題と社会主義運動の記述は同書「第三章 民衆運動の効用と「社会主義」—「ドッド・ストリート」から「血の日曜日」へ—」を参照した。

に85年8月、9月には逮捕者を出すにまで至った。『コモンウィール』誌にはこの時期以降度々「言論の自由」に関する論考が掲載されている。また先の「道路妨害」により逮捕者がでたことや「言論の自由」弾圧に対する抗議集会が行われたが、その抗議集会で逮捕された人たちの審理を傍聴した際に、モリスも警察への抗議をしたことにより、数時間後には釈放されるとはいえ、逮捕されている。最初に逮捕者を出した際の集会の群衆はわずかに数百人ほどであったが、この抗議集会には数千人規模の人数が集まり、以降の集会では数万人単位で人が集まるようになる。こうした「言論の自由」抑圧への抗議集会や失業問題なども相まって、「血の日曜日」事件で頂点に達する労働運動が巻き起こるのである。

こうして運動は一定の盛り上がりを見せるのだが、それが社会主義者への弾圧と同時に進行したものであるという事実も見のがしてはならない。同盟においても当然そのことは意識されていた。1886年7月10日の『コモンウィール』誌に掲載された「メリルボーンにおける警察の妨害」(H. G. Arnold, "Police Interference in Marylebone")と題された記事には、過去二年間において警察の妨害や住民の苦情もなしに演説していたにも関わらず、社会主義の人気が出てくるとみると警察は逮捕という形で妨害をするようになったとある^{*23}。またジェイムズ・オールマンが逮捕された際の審理での答弁において、彼は警察が社会主義者のみを攻撃しているという不正義を指摘している。社会主義者以外の集会が数多く開かれており、それが通りの妨害になっているにもかかわらず、干渉を受けることもないとも述べている。それこそはまさに警察の不公平さを表しているのだと^{*24}。モリスも当然こうした状況には気がついており、例えばオールマン事件に触れた日記において、「警察官は信じられないほどにイースト・エンドの貧者に対して

*23 *Commonweal*, 10 July 1886, p.119.

*24 *Commonweal*, 26 February 1887, p.71.

乱暴で荒々しい。そして彼らはオールマンをひどく不適切に扱った」と記している^{*25}。このように運動が盛り上がりつつも、困難さを経験していた時期に、『テーブルはくつがえる、またはナプキンは目覚める』はモリスによって書かれ、上演されたのである。

上述したように、11月5付けの『コモンウィール』誌の記事に『テーブルはくつがえる、またはナプキンは目覚める』の公演を振り返りつつプロパガンダとしての成功を謳っていることにも見て取ることができるが、この作品は時事問題を扱いつつも人々を楽しませるものであるとともに、この社会主義思想が広まりつつある一方でいくつかの問題に直面していた時期に書かれた教育の書でもあったと言える。1885年の「社会主義同盟声明文」において、同盟の目標は「全力をもってして、この偉大な目的に向けて人々を教育し、その教育を受け入れた人々を組織すべく努める」^{*26}ことであるとされている。こうした当時の情勢をモリスが強く意識していたこと、またその点を踏まえつつ劇を書くことにより、当時の社会主義の状況を明確にしようとしていたこと、そしてそれを社会主義者の教育に利用しようとしていたことは、この劇の特に第一部を見ると明らかである。

『テーブルはくつがえる、またはナプキンは目覚める』は二部構成の劇であり、第一部では同時代の出来事、事象あるいはモリスや社会主義運動が当時直面していた問題を法廷劇の形でパロディ化して描き出している^{*27}。例えば、冒頭のエピソードで裁かれる「気取り屋」(Mr. La-di-da)氏は明らかに有罪であるが、ジェントルマンであるためにその扱いを考慮される。「気取り屋」氏は一ヶ月間の刑期を言い渡され

*25 *Diary*, p.34.

*26 *Commonweal*, February 1885, pp.1-2.

*27 本文以下の同時代の問題との関連に関しては、Nicholas Salmon, "Topical Realism in *The Tables Turned*"を参照した。同論考は、同時代の事件、出来事が劇内のエピソードや判事ナプキンズやメアリー・ピンチ、ジョンあるいはジャック・フリーマンら登場人物の設定に如何に影響を与えているのかについても詳しい。

るが、その際には気取り屋氏が「泥棒や暴徒、その他の粗野な人々の悪影響」などによって品位を貶められることがないように配慮をせよとナプキンズ判事は請け負う^{*28}。対して、貧乏なメアリー・ピンチの裁判の場合、彼女がパンを三個盗んだという訴えを否定し続けても、彼女に対する証言が矛盾していようが、あるいは警察官の偽証があろうが、ナプキンズは彼女に18ヶ月の刑期という厳罰を与える。なぜなら、訴えによると、彼女はこの国の法と倫理を犯し、それによって「リスpekタブルな商人」に迷惑をかけたのであるが、それだけではなく、この犯罪は単なる窃盗を超えた社会的な重要性を持つ「革命的な窃盗」であるからだといっているのである^{*29}。明らかに、モリスが日記で描き、認識していたように、あるいは社会主義運動が直面していたように警察官や法は貧困者にはつらく当たるといふこと、その上この十九世紀イギリスの裁判では階級の差によって扱われ方が異なるという問題を描き出しているのである。

さらに、次のエピソード、ジョンあるいはジャック・フリーマンの裁判のシーンは当時の社会主義者たちが直面していた問題、社会主義者故に妨害、逮捕されるということ、あるいは「言論の自由」問題を描き出したものである。ジョンあるいはジャック・フリーマンは暴動、殺人の教唆、扇動および道路の妨害の罪で起訴されている。モリスや社会主義同盟がこの「言論の自由」問題を『コモンウィール』誌などを通して訴えていたことは述べた。先のオールマンの逮捕・裁判に見られるように、この問題は当時の社会主義運動に身近な問題であったが、モリスはさらに大きな視点から考えていたようでもある。モリスは、この問題を1886年7月31日の『コモンウィール』誌内の「街路における言論の自由」(“Free Speech in the Streets”)と題した論考でも論じているが、その中で彼は社会主義者も他の団体と同様に扱われる

*28 *The Tables Turned*, p.34.

*29 *Ibid.*, p.35 および p.43.

べきだとし、社会主義者だけを取り締まることの不正を訴えるだけでなく、それはより包括的な問題であり、「民衆は警察が彼らの奉仕者であるのか、それとも主人であるのかを決定」しなければならないのだと訴える^{*30}。この警察を巡る問題は、当時の運動論においても、また「血の日曜日」事件で痛感するような革命の諸問題に関するモリス思想という点でも重要であろうが、その点についてはここでは置いておく。とにかく、モリスがこの問題を民衆と警察や国家との関係についての問題だと見なしているように、社会主義運動および革命の基礎となるものだと見ていたのではないかということは指摘しておこう。

このモリスと同時代の重要な問題を明確に扱うことで描き出したジョンあるいはジャック・フリーマンの裁判の最中に革命が起き、劇は第二部に移ることになる。第二部は裁判のシーンとは打って変わって田園地帯の村落近くの野原が舞台となる。それは革命後の未来社会の風景である。次章では、この第二部に描かれる世界とその問題に関して論じることとする。

3 未来社会の構想と『テーブルはくつがえる、またはナプキンは目覚める』

第二部は革命後の世界、すなわち共産主義が達成された後の社会ということになる。モリスがそこで描くのは牧歌的なユートピア世界であり、後に『ユートピアだより』で描かれる未来社会と似た世界であると言えよう。たとえば、第一部で裁判にかけられ、18ヶ月の重労働を課せられたメアリー・ピンチは牢屋から助け出され、金持ちはいなくなり飢餓も窃盗もない時代に変化した革命後の世界で、きれいな服を着て、幸せだった子どもの頃を思い起こさせるような「初なりの西洋梨が熟し、小麦は刈り取り間近で、川の水位は低く草が生い茂って

*30 *Commonweal*, 31 July 1886, p.137.

いる」、そんな暑い夏の朝で幸福な暮らしをしている*31。

この明るい世界におけるシステムそのものにはモリスはほとんど触れることはしない。「建設的な社会主義者」として、ユートピアを語ることにそれ自体における危険性、あるいはユートピアを語る際に陥りかねない危険性への危惧を常に表明しつつも、ユートピアを語るという責任を引き受けたモリスにとっては、未来世界を語ることとその未来世界を完璧に細部まで描き出し、完全な姿とすることは当然のことながら一致しない。だからこそ、モリスの描く未来社会に社会主義の組織や機構を読み込もうとするならば、その欠如や不在を感じざるを得ない。この点はユートピア物語として描かれた『ユートピアだより』においてもまた同様である。E. B. バックスとの共著である『社会主義発展史』*32において、「…未来に関しては、我々は何も持っていない、歴史の発展からの単なる観念的な推測、すなわち我々が正当に理解していない力を持つ諸要素によっていつ何時でも干渉されるかもしれない論理的な結果、そういうもの以外の何も持っていない…」*33と語っているように、これは一貫したモリスのスタンスであると言えよう。

だが、もう一つ別のモリスの言葉、「ユートピアを読むことの唯一の安全な方法は、それを作者自身の気質の表現だと考えることであ

*31 *The Tables Turned*, p.72. モリスのユートピア、あるいは夢の世界は夏の風景とともに語られる傾向にある。例えば、『ユートピアだより』では舞台は夏、おそらくは6月上旬に設定されている (*Collected Works*, vol.16. p.6) し、また『ジョン・ボールの夢』でも舞台は夏である (例えば、*ibid.*, p.231)。また『ユートピアだより』においても『ジョン・ボールの夢』においてもユートピア世界や夢の世界に行く前、帰ってきた後の現実世界の季節は冬であることも付け加えておく。

*32 “Socialism from the Root Up”として1886年より『コモンウィール』誌に連載 (『ジョン・ボールの夢』連載による中断をはさみ1886年5月15日号より1888年5月19日号まで連載)、後校訂され1893年 *Socialism It's Growth and Outcome* として出版される。

*33 *Political Writings*, p.611.

る」³⁴、を思い浮かべるならば、『テーブルはくつがえる、またはナプキンは目覚める』と『ユートピアだより』の二つの創作の中で語られるこの未来社会の幸福な、それでいて抑制された世界観は、だからこそ、モリスらしさを表象しているとも言えよう。

第二部でナプキンは唯独り何故か資本主義社会の習慣、法律にとらわれており、新しい社会に溶け込むことができないまま逃げ惑う。彼にとって、新しい社会とは「法と秩序の敵」がいる場所としか映らない³⁵。この世界には、ナプキンは得意とし、もてあそぶ法律はない。ナプキンはこの世界では自分がひどい目に遭うに違いないとの勘違いから助けを求め、法律家として財産を集める方法をあなたに与えることができるから私は役に立つ、だから私を使って欲しい、助けて欲しいと述べたその提案は、この世界では何らの意味も持たない。その新しい世界では裁判所も刑務所も存在しないのだから。この新しい世界に突如として現れたように見える、旧世界の残滓を身にまとい、かつて自らが裁いた者たちに復讐されることを恐れ、あるいは「法」で裁かれることを恐れるナプキンは、新しい世界の他の住人と同様に親切に扱われ、そして彼の将来はこの世界の唯一のシステムとして描かれることとなる評議会 (the Council) でナプキンの出席のもと話し合われることとなる。

このナプキンは新しい社会とのずれはこの演劇における喜劇的部分として描かれるが、しかし、このことはまた滑稽さの中の悲劇を浮き彫りにするとも見える。それはコミュニケーションのずれ、あるいは断絶とも言える。第一部におけるナプキンは彼に判決を下されるメアリー・ピンチらとの間のどうしようもない断絶。それはモリスが社会主義において決定的に覆そうとした人々の間に存在する階級という断絶であった。その階級の断絶は革命により、この世界では消滅し

*34 May Morris (ed.), *William Morris: Artist, Writer, Socialist*, Oxford, 1936, vol.2, p.502.

*35 *The Tables Turned*, p.71.

たはずだ。しかし、他方で第二部で描かれる新しき社会に溶け込むことができない、法律のない社会に溶け込むことができないナプキンズとナプキンズにかつて判決を下された側の人々との間の立場を逆にしたかに見えるずれ/断絶がある。

これは、果たしてモリスの意図した世界なのであろうか。モリスは、この新しき平等な世界に溶け込むこともそれを理解する事もできず、かつての態度を許してもらおうと召使いとなることを懇願するナプキンズと、ナプキンズのことを罰し、殺そうとしている（と彼が思い込む）人々との間の滑稽な会話のやりとりによって、この劇のプロパガンダを完成させようとしたのだとも言えるかもしれない。この劇の最後のシーンでジャック・フリーマンが「悪党がもはや機会がないがために悪党ではあり得ないことを嘆く時、確かにテーブルはくつがえっているのだ」^{*36}と述べた時、それは以前とは世界が完全に変わり、ナプキンズという異分子さえ包摂しつつ、社会主義社会は展開していくということを示しているのだと。

実のところ、そのようなずれ/断絶、あるいは異分子とも見える要素は『ユートピアだより』にも描かれている。『ユートピアだより』では、それは不平屋（過去の礼賛者）として現れる。『ユートピアだより』において、未来社会に目覚めた十九世紀の社会主義者が未来の Kommunismus 世界の友人たちとテムズ川を遡る途上で出会う過去の礼賛者。十九世紀の社会とくらべると Kommunismus 社会はまるで天国のようだという言葉に対し、彼は、「しめった雲に座って賛美歌を歌うよりも、よりよく人生を送れるように思う」^{*37}と述べ、Kommunismus 社会を拒否する。もちろん、過去の社会に自らノスタルジーを抱く過去の礼賛者とどうしようもなく過去を引きずるナプキンズとの間にはその存在のあり方に隔たりがある。だが、先にも述べたとおり、この完

*36 *Ibid.*, p.85.

*37 *Collected Works*, vol.16, p.152.

壁でない「ユートピア」はモリスの未来社会論におけるひとつの特徴であろう*38。

ここで強調したいことは、こうしたユートピアを閉じた世界としては描かず、断絶さえも包摂するかのような、異分子とも見えてしまう存在にも開かれていると見えるようなモリスの描き方である。これは、この劇だけではなく、モリスの社会主義論のひとつの核としての個人と社会の問題に関わっているのではないだろうか。社会が開かれていることとユートピアが閉じた世界ではないこと、そして様々な存在を許容するものでもあらねばならないこと、これらはモリスの、というよりも理想的な社会の基本であろう。しかし、それだけではない。それだけでは個と社会の関係は曖昧なまま宙吊りにされるということになる。そのことへのさらなる考察がモリスの未来社会論を完成させる。それは、すなわち、様々な存在を許容するということは個人の行動としてあらゆる事に開かれているということと同義ではないというもう一つの社会の基本の確認でもある。そこに未来社会で唯一描かれるシステムとしての評議会の存在の意味もある。

モリスは後に『ユートピアだより』を書く前にアナーキストとの論争を行っている。その論争でモリスは、未来の社会における問題処理を如何にして行っていくべきかを論じている。そして、おそらくはこの論争はモリスの未来社会における個と社会の認識を深めたであろう。だが、モリスはそれ以前から芸術と社会の問題を通して、その問題に切り込みつつあった。それはまさにモリスの言う「民衆の芸術」論である。モリスにとって、「個人主義 (individualism) は個性 (individuality) を抑圧する」*39のである。芸術には当然個性があり得

*38 この点に関しては、拙著『空想と科学の横断としてのユートピア —ウィリアム・モリスの思想—』見洋書房、2008年、「第五章 過去と現代と未来と —『ジョン・ボールの夢』と『ユートピアだより』—」においても論じておいたので参照されたい。

*39 *Commonweal*, 12 June 1886, p.83.

る。しかし、それは単なる個人主義とは一線を画すものであるべきだという。民衆芸術は個と社会、個と伝統との協調の中で造り手が個性を失うことなく全体へと従属する中で生み出されるものであるが、現在の社会でまかり通っている個人主義はそのつながりを壊し、全体を完全な個に分裂させてしまうのだという。故に現代社会において、真の芸術たる民衆芸術は死に瀕しており^{*40}、また民衆が真に個性を発揮することができないのだ。

こうした個人主義への批判的論調はこの劇の中でも皮肉めいた喜劇の形で描かれている。羊を殺してしまった犬を撃ち殺さなければならなくなり、そのことを評議会で話し合うという場面がそれである。その撃ち殺されるべき犬を自分の事だと勘違いしたナプキンズは撃ち殺さないでくれ、この世界に牢屋がないというのなら牢屋を造って私をそこに入れてくれと懇願する。それに対し、革命前の社会において社会主義者だった人物は、「…自分専用に監獄を欲しがるとは！これは全くの個人主義だ…」^{*41}と述べる。このエピソードをモリスが意識して描いていたことは、その一連の台詞の中にハーバート・スペンサーとその個人主義の理論を信奉したオーベロン・ハーバートの名をあげていることから理解できるだろう^{*42}。

モリスにとっては、個人と社会との有機的な連携の中にこそ芸術の生きる途もあったのであり、そこにおいてこそ平等な未来社会の機能も存在したのである。だからこそシステムをユートピア内に描くことの危惧を語りつつも、この短い劇の内部において物事の処理をするための評議会を描き出したのである。それはまた『ユートピアだより』の第十四章「物事は如何に処理されるのか」に描かれるモート (Mote)

*40 この点に関しては、拙論「ウィリアム・モリス、アナーキズム、ユートピア—個と社会の融合を巡って」『社会思想史研究』第33号、2009年、101-115頁を参照のこと。

*41 *The Tables Turned*, p.82.

*42 *Ibid.*, p.82 および同書注24を参照のこと。

と呼ばれる集会を先取りしたものだと言えるだろう。ともかく、「人は社会の外側ではあり得ない」*43と考えるモリスにとって、社会の基礎たる人のつながり、フェローシップを破壊しかねない個人主義は問題外なのである。

集団の芸術である劇の中でのそのナプキンの個人主義への批判というこの場面は、モリスの芸術への、未来社会への思想・態度そのものを示していると言えるだろう。社会は開かれたものである必要はある。だが、他方でその社会を壊す個人主義は許容されない。それがモリスの一貫した未来社会論ではなかったか。モリスの描く未来社会はこの「開き」と個人主義への批判とのあやういとも見えるバランスの上に成り立っているのかもしれない。『テーブルはくつがえる、またはナプキンは目覚める』の第二部は未来社会の短い描写にすぎないし、またナプキンを巡る喜劇/悲劇を軸に展開されているとは言え、明確にモリスの未来社会論を反映しており、『ユートピアだより』連載の前に展開されたアナキストとの論争を先取りしたモリスのひとつの「解答」であり、また『ユートピアだより』そのものの先取りでもあるのだ。

おわりに

『テーブルはくつがえる、またはナプキンは目覚める』は、先にも述べたとおり、基本的には雑誌『コモンウィール』誌の資金調達のために書かれ、上演された劇であるが、それだけでなく成功したプロパガンダ劇でもあった。だが、モリスの、あるいは社会主義団体の直面していた同時代の問題をとらえつつ、時には戯画化しつつ描き出したものでもあり、こうした時事問題を明確に描き出すことで単なる喜劇で終わらない内容を含んでいる。この第一部の存在は時代を反映した

*43 Tony Pinkney (ed.), *We Met Morris: Interviews with William Morris, 1885-96*, Reading, Spire Books Ltd, 2005, p.84.

教育の劇として重要な内容を含んでいる。それだけでなく、第二部の未来社会の描写は、モリスらしくと言えようが、曖昧なものであり、その長さも第一部の半分程度にすぎないが、確かにモリスの論じてきた、そして論じて行くであろう未来社会像・未来社会論と一致するものであった。それは後に『ユートピアだより』の中で、あるいはモリスの他の講演の中で、そしてあるいはアナキストとの論争の中でさらに展開されて行くであろう。

ナプキンズは第二部では未来社会の異分子として描かれる。そして、その存在は未来の理想社会における暗い予兆であるかもしれないし、あるいはさらなる希望であるかもしれない。平等な未来社会という理想像は社会主義者の目指すものであったが、その一方でユートピアが否応なく持つとも見える同質性は、やはりある種の「偏在する強制力」を持っているのだとも言えないだろうか。そうした時に、この異分子の存在は、一見したところコミュニケーションの断絶をもたらすようなこの存在は、別のあり方を受け入れる開かれた社会としての有り様を垣間見せるのである。

『テーブルはくつがえる、またはナプキンが目覚める』では、最終的には、法律家のいない世界で自らのでき得ること―「母なる大地と大地が育てたあらゆる世代の人々の伝統と工夫」*44を利用して生きること―をすることによって生きなさいという言葉を与えられ、それを受け入れざるを得ないナプキンズが描き出され、未来の社会は一定のまとまりを与えられるように見える。コミュニケーションの断絶は、ここではその原因たるナプキンズをも社会の中に包摂することで消え去ったとも言えるかもしれない。しかし、こうした存在、異分子であり、コミュニケーションの断絶を自ら行うとも見える存在は『ユートピアだより』で不平屋として復活する。モリスの描く未来社会に見え隠れするこの異分子の存在/コミュニケーションの断絶とも見える有

*44 *The Tables Turned*, p.83.

り様は、しかし、そうした存在をも包摂する社会として、あるいはそうした存在を提示することによりユートピア世界の揺らぎを見せることで、さらなる社会の変化や「開き」の可能性をも見据えているとも言えるのではないだろうか。『テーブルはくつがえる、またはナプキンは目覚める』は、時事問題を扱うことでモリスの時代性を明確に示しているだけでなく、『ユートピアだより』を先取りするものとしての重要性を持つと言えるだろう。

(英米文学科専任教員)